Iwate Prefectural University
ipu 岩手県立大学
地域とキャンパスをつなぐ、学生参加型広報誌
2011 spring
47

Link Web IPU URL／http://www.iwate-pu.ac.jp/
このマークの記事の詳細は岩手県立大ホームページに掲載しています。

CONTENTS

02 特集1 フィリピンの子どもたちに豊かな水を
初の海外ボランティア・井戸プロ・ワークキャンプ

04 特集2 学長トークセッション
大学院の学びの魅力を院生に聞く

06 特集3 地域の中核人材育成と活力創出に貢献する大学をめざして
［第二期中期計画策定］

08 在校生紹介
10 県大YELLS
11 卒業生紹介
12 IPU通信

Iwate Prefectural University Information

IPU通信

岩手県立大学からのお知らせ

このたびの震災により被害を受けた皆様に心よりお見舞いを申し上げます

【学長メッセージ】

このたびの東日本大震災により被災された方々に、岩手県立大学を代表して心からお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられた方々に対しまして謹んで哀悼の意を表します。

今回の事態は、岩手県立大学といたしましてもかつて経験したことのないものとなっておりますが、教職員一丸となって学生の学習環境の正常化に向けて努力する所存でございます。

被災された学生に対しましては、入学手続きや学生生活をおくる上で困難な状況がある場合には、特段の配慮を行うこととしております。

何かお困りのことがある場合には御遠慮なく御相談いただきますようお願いいたします。

平成 23 年 4 月 15 日
岩手県立大学　学長　中村慶久

※具体的な支援の内容は岩手県立大学ホームページをご覧ください。

人事情報

●**退職**（平成23年3月31日付）

看護学部／教授	石川みち子
看護学部／教授	竹崎登喜江
看護学部／講師	石井真紀子
看護学部／講師	浅沼　優子
看護学部／助教	木内　千晶
看護学部／助手	高野　朋大
社会福祉学部／准教授	鎌田　滋子
社会福祉学部／准教授	渡辺　道代
ソフトウェア情報学部／講師	加藤　貴司

●**採用**（平成23年4月1日付）

看護学部／准教授	村松　　仁
看護学部／講師	相墨　生恵
看護学部／講師	堀篭ちづ子
看護学部／講師	松川久美子
看護学部／助手	野田真貴子
総合政策学部／講師	辻　　盛生
総合政策学部／助教	鈴木　正貴
盛岡短期大学部／講師	高泉　佳苗
学生支援本部／准教授	高瀬　和実

●**昇任**（平成23年4月1日付）

看護学部／助教	及川　紳代
総合政策学部／教授	斎藤千加子
総合政策学部／教授	佐野　嘉彦
総合政策学部／教授	高嶋　裕一
総合政策学部／助教	宇佐美誠史
盛岡短期大学部／准教授	長坂　慶子
盛岡短期大学部／助教	笹田　怜子
盛岡短期大学部／助教	松本　絵美
宮古短期大学部／准教授	神谷　厚徳

TOPICS IPU

平成22年度学長奨励賞

社会福祉学部
- 関澤　真理　第 27 回全日本武術太極拳選手権大会で活躍

ソフトウェア情報学部
- 今　隼太、千葉裕介、清水　遥、齋藤大貴
  ET ロボコン 2010 東北地区大会総合優勝
- 堀江佑太、鈴木広大、田中一穂、畑中美智子
  ET ロボコン 2010 東北地区大会総合 3 位
- 菊池幸恵　情報処理学会第 72 回全国大会学生奨励賞受賞
- 十文字健之　　同上
- 濱田憲明　　同上

ソフトウェア情報学研究科
- 阿部俊祐　情報処理学会第 72 回全国大会学生奨励賞受賞
- 木下尋斗　　同上
- 佐藤剛至　　同上
- 陳　実　　同上

総合政策学部
- 佐藤麻衣、大巻雄太、奥寺麻衣、菊池貴行、高橋裕太、藤村遼太郎
  「アロニア福田パン」商品の企画・販売
- 岩崎みなみ、住吉未佑、橋場早希　自転車の安全利用の普及

総合政策研究科
- 小山田智彰　アツモリソウの画期的培養方法の確立

盛岡短期大学部
- 高橋華慧　ロシアミッション（日本青年会議所主催）で活躍

レクレーション&ボランティアサークルどろんこ隊☆
- 地域の子育て支援活動への貢献

学生ボランティアセンター厳美出張所
- 岩手・宮城内陸地震被災地での住民支援

TEAM DAKS（チーム　ダックス）
～子どもたちによる災害福祉マップづくり～
- 子ども参画の災害福祉マップの企画・実施による地域貢献

いわてチャリパト隊、川前パトロール隊
- 地域見守り活動等の企画による巡回の実施

まちづくり研究所がCR-1グランプリ優秀賞受賞

県立大と盛岡市が設置している「盛岡市まちづくり研究所」の調査研究（盛岡市の社会動態及び人口の将来推計）が、財団法人日本都市センター主催の第一回都市調査研究グランプリ（CR-1グランプリ）において自治体実施調査研究部門優秀賞を受賞しました。

Iwate Prefectural University ipu 47 2011 spring
地域とキャンパスをつなぐ、学生参加型広報誌 ●発行・2011年4月15日

公立大学法人 岩手県立大学 企画室
●〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字巣子152-52　●TEL／019-694-2005　FAX／019-694-2001
●URL／http://www.iwate-pu.ac.jp/　●e-mail／management@ml.iwate-pu.ac.jp

特集1 フィリピンの子どもたちに豊かな水を

Link Web IPUSVC

初の海外ボランティア 井戸プロ・ワークキャンプ

学生ボランティアセンター（IPUSVC、略称ボラセン）が、本学初の海外ボランティア活動に取り組みました。フィリピンに飲料水用の井戸を掘り続けている日本のNGOが展開する活動への協働参加です。題して「県大・井戸プロジェクト・ワークキャンプ」。プロジェクト発足から現地ワークキャンプ実践までの道のりを現地報告を交えてご紹介します。

三者協働のプロジェクトが実現
～JPCom×NORIE×IPUSVC～

平成21年6月から始まった、井戸掘り資金を集める支援活動「県大・井戸プロジェクト（IDOプロジェクト）」は、国際協力団体JPCom、アーティストNORIEさん、県大学生ボランティアセンターの三者による協働の取り組みです。ボラセンIDOプロスタッフが、NORIEさんのポストカードを大学祭や地域イベントなどで販売し、その収益金の一部をJPComを通して、フィリピンの村で井戸を掘る資金として提供。ポストカード販売と同時に募金活動も行い、平成23年1月までに井戸掘りに必要な経費の半分にあたる約15万円を集めました。

平成22年の夏には、IDOプロの活動を通して学生からフィリピンで活動したいという声が高まり、学内の助成に応募、学長裁量経費を受けて、平成23年3月、現地でのワークキャンプ参加が実現しました。

ワークキャンプ参加者
鈴木佐知子（社福1）、高井勇輝（ソフト1）、宇部純香（看護1）、渡辺琴乃（看護2）、八重樫綾子（社福3）、松本唯美（社福3）、那須智絵（社福3）、小野寺理佳（社福3）、浅石裕司（社福・院1）、山本准教授

IPUSVC
（岩手県立大学学生ボランティアセンター）
全国でも数少ない大学設立学生運営のボランティアセンター。地域からのボランティア依頼に応えるだけでなく、さまざまな地域に出かけ、ボランティアニーズを探りながら活動を生み出すプロジェクト型の活動展開を行っています。

NORIE（髙木紀枝）さん
個性的なイラストと詩を載せたポストカードの作者NORIEさんは、関西在住のアーティスト。JPComの活動で訪れたフィリピンで、飲む水さえ手に入らない現地の状況に愕然とし、自らのポストカード売り上げをフィリピンの井戸製作のために支援することを決意。本職は、福祉施設職員として介護の現場で奮闘中。

JPCom
（Japan Philippines Community & Communication）
日本とフィリピン、子どもたちの笑顔が広がる地域とくらしを創るNGO。代表の桑原英文さんは、フィリピンでの活動のほかに、災害ボランティアのプロとして、多くの災害現場に出向き、災害ボランティアセンター運営の支援や支援者養成にあたっています。

国内活動の経緯

- **平成21年5月** 社会福祉学部山本准教授が、「ポストカードを売って、フィリピンに井戸を作ろう」と井戸プロジェクトを提案。
- **6月** 「IDOプロ」として活動スタート ボラセン横のスペースで毎昼販売。
- **9月** ボランティア研修会に参加するため大阪へ。大阪にて、作者NORIEさんと県大の学生が初対面
- **10月** 大学祭にて、作者NORIEと共にポストカード販売
- **平成22年4月** IDOプロ2年目スタート
- **5月** 1年生2名を副代表につけ、3人でのプロジェクト運営へ
- **7月** 現地フィリピンへ学生が井戸を掘りに行く話が出る。
- **8月** 「フィリピンワークキャンプ」計画始動、ワークキャンプ参加者募集 ボラセンのメルマガで、登録者の学生にも参加希望を募る。
- **平成23年1月** 第1回 ワークキャンプ参加者ミーティング
- **2月** 第2回 ワークキャンプ参加者ミーティング JPComの活動や地域理解、現地での活動について勉強会を開催。

※IDOプロ代表の阿部さんは、ワークキャンプには参加していません。

ポストカードの販売と募金活動をするIDOプロ代表の阿部美智子さん（右端）とスタッフ

私はやる、YES, I DO！

鈴木佐知子さん（社会福祉学部1年）

日本で応援してくれた人たち、ワークキャンプの仲間たち、フィリピンの村の人たち… それぞれの想いが「井戸」という形となって完成したときには、嬉しさと感謝で胸がいっぱいでした。井戸掘りというひとつの目標は達成しましたが、これからもまだ、私たちにできることはきっと沢山あると思います。みんなの「I DO（アイドゥー）！」の気持ちを大切にしながら、これからもIDOプロジェクトを続けていきたい！… という気持ちをあらたにしました。

IDOプロジェクトは今後も継続していきます

県大ボラセンアドバイザー
山本克彦准教授
（社会福祉学部）

どんな活動にも「物語」があります。IDOプロジェクトのはじまりは、関西のアーティストNORIEからの1本の電話でした。「フィリピンの子どもたちに、きれいな水を。そのために井戸を掘りたい！学生さんに協力してほしい。」… 僕は即OKをしました。きっと、学生たちはこの想いに共感し、力を発揮してくれると信じていたからです。

それから2年間、学食前で毎日のポストカード販売、さらに大学祭や地域のイベントでも、NORIEの想いを形にしようと学生たちは熱心に活動を継続。いつしかフィリピンに行ってみたいという夢を持ち始めていました。この3月、資金も集まり、大学からの支援も受けてその夢が実現しました。

朝早くから夕方まで、根気よくパイプを打ち込み続けて3日目…井戸からは飲料水としての基準を満たす水がキラキラと光を浴びてあふれてきました。感動でした。身近な場所で飲料水が手に入るということは土地の人々の生活を大きく改善します。そしてこれからの毎日、この場所に人が集まり「井戸端会議」がはじまるのです。

おもてなしの昼食に感謝。現地の食文化にふれることができました。

9日、いよいよ井戸掘り開始。早朝から、夕方まで交代で鉄パイプの打ち込み！

井戸には記念の大理石プレートが設置されました。

きれいな水がキラキラ光って出てきました。みんな大歓声。

別れの日、ホストファミリーのママと何度もハグをしました。

子どもたちの笑顔が、いつも私たちに元気をくれました。

井戸建設地

●フィリピン共和国ヌエバエシア州ザラゴザ町 マナオール第6・7地区（ルソン島中部）

ザラゴザ町マナオール第6・7地区は、ルソン島の中部にある人口260人の地域。主な収入源は、稲作、養豚、畑作など。地区には、浅い井戸しかなく、安全な飲料水が入手できず、不衛生な水の影響で間質性肺炎やコレラ、赤痢などが発生しています。今回は、現地地域住民と協力し、土壌汚染の進んでいない地下約30メートル以上にある水脈を掘り当てることになりました。

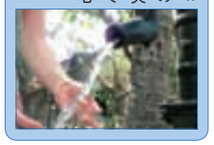
現地活動報告（平成23年3月7日～18日）

- **7日** 盛岡出発
- **8日** 成田国際空港からマニラへ マニラからバティタン村へ移動（マニラから155㎞）バティタン村歓迎夕食会・ホストファミリー紹介 各自ホスト宅へ移動ホームステイ開始
- **9日** ザラゴザ町マナオール第6地区へ移動 井戸掘りオリエンテーション 井戸掘り開始・子豚小屋づくり
- **10日** 井戸掘り作業 マナオール村長表敬訪問 村の子どもたちと交流

マナオール村の村長さんから、村の抱える就労や教育、医療等の課題について伺いました。海外からの支援も、継続性や質への配慮が重要であると改めて感じました。［八重樫綾子］

- **11日** 井戸掘り作業 マナオール小学校訪問

ついにきれいな水が!! 僕たちもマナオールのみんなも本当にいい笑顔。みんなの役に立てて本当によかったと心から思いました。［高井勇輝］



- **12日** マグパパヤラオ村コミュニティ・ファームで以前からのメンバーと交流 ローカルマーケットで買い物 マナオールにてさよならパーティー

養豚場の見学を行い、「仔豚銀行」という活動に関わる人たちと交流。皆あたたかくて笑顔が素敵でした。［鈴木佐知子］

- **13日** 後半プログラム マナオールからターラックを経てバギオへ移動 現地スタッフとミーティング

ホストファミリーとのお別れの日。ママと何回もハグをしました。［渡辺琴乃］

- **14日** しょうがい児リハビリセンター（STAC5―Baguio）にて療育見学 しょうがい児宅にホームステイ
- **15日** 子どもたちとの外出プログラム ホストファミリーと帰宅

STAC5-Baguio（しょうがい児リハビリテーションセンター）でゲームや表彰、歌の披露などが盛り込まれたプログラムに参加。子どもたちと楽しいと思う気持ちを共有できました。［松本唯美］

- **16日** 長距離バスでバギオからマニラへ マニラ市内散策

フィリピンで共に過ごしてきた仲間との絆は、私が今回のIDOプロジェクトで得た一番の宝物。『心を通わせることは、国境を超える』のです。［宇部純香］

- **17日** マニラ国際空港から成田国際空港へ
- **18日** 盛岡着

IDOプロジェクト記念の大理石プレート

特集2 トークセッション
教員と学生による対話集 Vol.8
Link Web IPU

学長トークセッション

大学院の学び の魅力を院生に聞く

教員と学生が身近な話題から現代社会の問題までを自由に話し合うトークセッション。
講義では聞けない疑問、珍問なんでもありの学生企画コーナーです。

Cast

- 中村 慶久　岩手県立大学学長　Nakamura Yoshihisa
- 栃内 優美　看護学研究科博士前期課程2年　Tochinai Yumi
- 吉田 渡　社会福祉学研究科博士後期課程2年　Yoshida Wataru
- 浅井 勇貴　ソフトウェア情報学研究科博士前期課程2年　Asai Yuuki
- 藤原聖史　総合政策研究科博士前期課程1年　Fujiwara Kiyofumi

吉田渡●盛岡市出身。県立大学社会福祉学部卒業、県立大学大学院社会福祉学専攻博士前期課程修了。介護予防に着眼して地域福祉を研究。日本地域福祉学会、日本キリスト教社会福祉学会所属。

栃内優美●盛岡市出身。本校の看護学部卒業後、盛岡市内の病院に勤務し7年目。成人看護学研究分野の慢性疾患CNS(専門看護師)コースに所属。糖尿病患者の療養とそれに対する看護について研究中。

浅井勇貴●花巻市出身。県立大学ソフトウェア情報学部卒業。学部時代より経営情報システム学講座所属。幼稚園を対象とした情報技術の活用について研究。2009年4月より「岩手県私立幼稚園ポータルサイト」運用開始。

藤原聖史●福島市出身。県立大学総合政策学部卒業。現在、チシマゼキショウ属の分類学的遺伝子解析を実施中。栽培アツモリソウの遺伝子解析を行い、山に復元すべきアツモリソウの特定に取り組む。

中村慶久●東北大学大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。専門分野は、電子工学・磁気記録工学。東北大学教授（電気通信研究所）、東北大学電気通信研究所所長、(独)科学技術振興機構JSTイノベーションプラザ宮城館長を経て2009年4月1日より県立大学学長。

大学院生の研究テーマ

学長●それでは、率直かつ簡潔に自己紹介から（笑い）。

栃内●県大の看護学部を卒業して、盛岡市内の病院に勤務しています。成人看護研究分野の慢性疾患CNS（専門看護師）コースで学んでいます。糖尿病などの慢性疾患を抱える患者さんのケアについて研究しています。

浅井●私は、幼稚園を対象とした情報技術の活用について研究しています。「岩手県私立幼稚園ポータルサイト」の運用を通じて、幼稚園経営や幼児教育への効果などについてまとめています。

吉田●介護予防に着眼して地域福祉を研究しています。

藤原●私は、大学に入るなら幅広いことを学びたいと考え、総合政策学部を選択しました。現在は、アツモリソウの保全に関する研究に取り組んでいます。

大学院の敷居は高くないし、若い時期の2～3年は長くない

学長●次に、なぜ県大の大学院に進もうと思ったのかを聞くことにしましょう。

栃内●一つには、やはり母校だということが大きな進学の動機となっています。そして、CNSコースは、どこの大学にもあるわけではありません。母校にあるのは幸運だったと思います。

学長●県大のCNSコースは、これからの時代を担う専門看護師養成の舞台となっていくでしょうね。

浅井●私の場合は、国内・外での学会発表など大学院ならではの経験、自分の研究が地域社会に与える影響の観察、社会で通用する能力・考え方の習得をしたいと感じたことが大学院進学の動機です。学部4年間では足りないと感じました。

学長●私も学生時代に大学の4年間では能力不足と感じた一人です。吉田くんの進学の動機はどんなことでしたか。

吉田●博士前期課程のときの指導教員が私と同じクリスチャンだったことが大きいです。研究の問題意識を心から理解してくれる指導者との出会いが、進学を決意させてくれました。

藤原●私は、4年の春には就活をやめて院に進むための準備を始めました。大学院に進むための入試対策ということでなくて、専門研究をしっかりやるということです。

学長●そうだね、普段の勉強をしっかりやっていれば、大学院の敷居は高くないし、若い時期の2～3年は長くない。本学の大学院では、就職した後に大学院で専門研究に臨むことのできる道も開かれています。学生のみなさんにとって大学院は、自分をより成長させることの出来る場であり、大きな成長のチャンスのある場だと認識してほしいですね。

大学院をもっと活発な議論の場にしたい

学長●県大の大学院をこのようにしたいという要望がありますか。

吉田●もっと学部生が進学を志す大学院にしたいです。そのためにも、できるだけ早く研究活動の面白さを体験することが必要だと思います。これによって論理的に考える力を格段に向上させることができますので、進学の実力が自然に身につくのではないかと思います。

学長●何が問題なんだろうか。

吉田●苦手意識を持たずに、いろいろな考えの人と積極的に議論することだと思います。自分と向き合うだけでなく、他者と向き合うことが研究には絶対に必要です。

学長●もっとコミュニケーションしなさいということだね。

吉田●少なくとも、大学院こそ議論の場だと思うのです。

藤原●総合政策学部の場合は、多くの方が総政に理系分野があることを知らないということに不安を感じます。もっとアピールすべきだなと思います。

学長●大学院に進むことの意味も同じように、アピールが足りないかもしれないね。学生たちに力をつけてもらうには大学院があるぞと言いたいですね。

対話の詳細はWeb版で読むことができますので、そちらもご覧ください。

特集3

地域の中核人材育成と活力 創出に貢献する大学をめざして

Link Web IPU

第二期中期計画策定

大学がめざす6年後の姿

地域の中核人材育成と活力創出に貢献する大学

1 学生の「志」を高める大学（教育）
学生一人ひとりが持っている資質を引き出し、各分野のリーダーとしての役割を担う「志」を持つ人材（地域中核人材）を育成します。

2 地域から頼られる大学（研究・地域貢献・国際交流）
地域特性や地域のニーズを踏まえた研究活動を推進し、「知の拠点」として、地域社会の活性化に貢献。また、国際交流を活性化し、国際的視野を備えた人材を育成します。

3 効率的・機動的な大学運営（業務運営等）
組織運営体制の強化、人事制度の適正化、安定した財務基盤の確立、広聴広報活動の推進などにより、県民から信頼される大学づくりを進めます。

重点計画（6項目）

		目指す成果・達成状態
教育	目的意識、学習意欲ある入学者の確保	○国公立大学の全国平均を上回る受験倍率の確保 ○大学院の定員充足
	体系的で一貫性のある教育プログラムの実施	○教育プログラムの検証・改善 ○基盤教育と専門教育の組み合わせによる学生満足度の向上
	就業力育成支援による高い就職率の維持	○採用先企業や卒業生の進路に関する満足度・就職率の高水準を維持 ○県内への就職率の向上
研究・地域貢献	地域に評価される研究推進、成果の公表	○積極的な論文・学会発表 ○多様な媒体を通じた研究成果の周知・活用
	産学公連携の強化とシンクタンク機能の発揮	○受託・共同研究の増加 ○県民のシンクタンクとしての政策提言の増加
大学運営	教育・研究に意欲的な教職員の育成	○教職協働による学内の活性化

基本となる姿勢［中期目標］

学生目線
学生の成長を最も重視する視点
学生を主人公とした学生の志を高める教育
時代の要請や地域社会の要望に応える人材の育成。
学生の自主性、自立性を育て、学びを支える観点から大学の資源を配分。

地域目線
地域社会を支える視点
岩手の活力を創出する研究・地域貢献
困難な時代にあって地域社会を支え、
岩手の活力を創り出す社会貢献を積極的に展開。

県立大学をめぐる環境変化に積極的に対応したい

岩手県立大学理事長 **相澤 徹**

県立大学の新たな6年間の始まりにあたり、学生目線（学生の成長を最も重視すること）、と地域目線（教育と研究によって地域社会を支えること）という2つの視点に立って、「地域の中核人材育成と活力創出に貢献する大学」の実現を大学運営の基本姿勢としました。

この目標を実現していくためには、「18歳人口の減少」と「人口減少や高齢化などの地域社会の変化」という大きな環境変化に積極的に対応していくことが重要だと考えていました。しかしながら、未曾有の災害が岩手県を襲うという事態に直面して、「復興に向けて県立大学としてどう貢献していくのか」という大きな命題にも立ち向かっていかなければならなくなりました。復興に向けては想像を超える困難が待ち受けていると考えなければなりません。そのような復興を担っていく人材をどう育てるのか。産業や医療、福祉などの現場で復興とその先の繁栄を担える人材を育てるために、教育という大学の営為を一層充実・強化し、ゆるぎないものにすることが必要です。研究分野においても、岩手の復興を見据えて、各学問分野において調査・研究を強化し、被災者の生活再建に向けた政策提案を着実に進めていくことが求められます。

復興を目指す県民の方々の大学に対する大きな期待に全力を挙げて応えていかなければなりません。

同時に、このような努力こそが、18歳人口が減少する中での「大学間競争の時代」に打ち勝っていくことにつながります。また、人口減少や高齢化などの地域社会の変化に対応して県民生活をより良いものにするという使命を達成していくことにもつながっていきます。

このような大学の努力を支えていくために、教員や職員の人材育成の充実、業績評価の処遇への反映、事務局機能の強化（特にも法人採用職員の雇用形態や処遇の改善）など、意欲的に仕事に取り組める体制を整備したいと考えています。計画が絵に描いた餅にならないように、実行とその結果の検証というサイクルの実現にも意を用いて参ります。

この6年間、かってなかった大きな試練に直面している県民の皆さんとともに手を携えて、着実な歩みを進めて参りたいと思います。

県民から愛され、求められる存在でありたい

岩手県立大学学長 **中村 慶久**

このたびの第二期中期計画においては、教育と研究の成果を地域に反映させること、さらにはそのための基盤整備をすすめる体制づくりに主眼を置いて計画を策定しています。

重点計画として、教育・研究、地域貢献、国際交流に関わる6つの取り組みを定めていますが、なかでも、地域貢献に関わる目標を達成するための重点計画として掲げた、産学公連携の強化と県民シンクタンク機能の強化は、今後の大学の方向性を大きく左右する重要な取り組みであると考えています。産学公連携の強化のための措置として、「いわてものづくり・ソフトウェア融合テクノロジーセンター」の下で、産学共同研究や高度技術者の育成を推進します。また、県民シンクタンク機能の強化のための措置として、「地域政策研究センター」の下での実証的な調査研究を通じて、県民生活の課題解決のための政策提言に取り組む予定です。

計画に定めた様々な取り組みは、岩手県立大学が、県民から愛され、求められる教職員の存在でありたいと願う教職員の総意から生まれたものです。

平成23年3月11日、岩手県は東日本大震災という、これまでの想像を絶する非常に大きな災害に見舞われました。私たちは、被災地や学生等への当面の支援体制の充実はもちろんのこと、これからの岩手県の活力再生という復興プロセスの中で、岩手県立大学としてもその機能・役割を最大限に発揮できるよう全学をあげて取り組み、県民の皆様とともに歩んでいく存在になる必要があります。

今年度から始まる中期計画は、このような緊急事態において一層本学の真価を問われるものとなり、その実現は岩手県が再び元気を取り戻す原動力となるものと信じています。

新たな創造の時代をひらく岩手県立大学の今後にご注目下さい。

どんなことにでも対応できる限界を感じさせない人でありたい。それが私の将来に向かってのテーマです。

総合政策学部4年
吉野ゼミ［地域社会学講座］
甲斐谷 望さん

元気です県大生
私の未来設計
On Campus

報道関係の仕事に就くことを考え始めた高校時代

甲斐谷さんは、盛岡第二高校の1年生から放送部に所属し、3年生となる直前の春、第78回選抜高校野球大会（春の甲子園2006年3月）の開会式と閉会式の司会を務めています。開会式と閉会式の司会を務めるのは、岩手県では初めてとなる快挙でした。

「高校2年の夏に行われた第52回NHK杯全国高校放送コンテストの朗読部門で準優勝したことで、春の甲子園の司会・進行役を務めることになりました。当時、放送委員は、アナウンスだけでなく、報道としての取材活動も行っていましたから、アナウンサーというより報道関係の仕事に就くことを考え始めていました」

社会に出るための足がかりを大学時代に築こうと決意

報道関係の道に進むとしても、地元で活動したい、そのためにはもっと地元の地域を知らなければと考えていた甲斐谷さんは、県大への進学を決めます。

「広く地域を知りたい、見つめてみたい、そのためには地元の大学でなければと考え、AO入試による県大への進学を決めました。AO入試を選んだのは、高校時代に何をやったかを重要視していただけるということがあったからです」

甲斐谷さんは、入学に際して、大学で自分には何が出来るのか、何をするべきなのかを真剣に考えました。

「私は、学内学外にかかわらず、社会とのつながりをいろんなところで活かすようにしたいと思いました。どんな道に進むとしても社会に出るための足がかりを大学時代に築こうと決めたのです」

大学2年次が私のターニングポイント

甲斐谷さんは、総合政策学部1年の時に、県民会館で行われた出身高校の新校舎落成式典の司会を務め、地元報道関係者の注目を集めました。その後、地元放送局からの依頼があり、地元制作番組のナレーションを担当。そして、甲斐谷さんが人生のターニングポイントになったという2年次の夏、大きなイベントの司会の依頼が舞い込みます。ETロボコン東北大会の司会です。

「ETロボコン東北大会がスタートしたのが、2年次の夏で、第一回の会場が県立大学でした。結果的に4年次までの3年間、ETロボコンの司会を担当することになったわけですが、私にとっての最大の成果は、学部の垣根を越えた交流が生まれたことでした。学外イベントの司会依頼が来るようになったのも2年次のことですから、大学2年次が私のターニングポイントだったと思います。将来は、報道関係の仕事に就きたいと強く願うようになりました」

多くの出会いが私の可能性を拓いたと感じています

甲斐谷さんは、2年後期に地域政策講座を選択、吉野ゼミでの学びの中で、地域でまちづくり活動を行う多くの人に出会うことになりました。

「ゼミでは、岩手のいろんな地域に出向いて、調査研究活動を行うのですが、まちづくり活動に熱心に取り組んでいる方の話はとても有意義で、今後の私の活動にきっと役立つだろうと思えることばかりでした。大学生活の4年間をふりかえると、学部の垣根を越えた交流や学外のいろんな方との出会いが、私の可能性を拓いたのだと感じています。出会いによって社会への視野が広がり、出会った多くの方が私の可能性を確かめる機会を与えてくださいました。本当に感謝しています」

この春、甲斐谷さんは、地元放送局への就職を決め、念願だった報道の世界に羽ばたきます。（平成23年2月取材）

卒業研究発表を終えて講評会に臨んだ地域政策講座のみなさん（前列左から3番目が甲斐谷さん）

ゼミでは、まちづくり活動を行っている人に会って活動の始まりと活動への思いを熱心に聞きました。人とふれあい話を聞き出す姿勢が身についたと思います。

熱心な質疑応答が交わされた平成22年度卒業研究発表会地域政策学講座の発表会場。甲斐谷さんは「コミュニティFM放送が地域社会に与える影響に関する研究」について発表しました。

ゼミで2010年5月に一関市室根で行われたNPO法人「森は海の恋人」の活動に参加し植樹をしました。

2010年12月に横浜で行われた全国組込技術展（ET2010）のレセプションパーティで司会を務める甲斐谷さん。

2010年9月にいわて県民情報交流センター（アイーナ）で開催されたETロボコン東北大会のスタッフのみなさんと記念撮影。甲斐谷さんは大会の司会進行を務めました。

県大YELLS

県大 YELLS のコーナーでは、
県立大学に寄せられたメッセージをご紹介しています。

学生のみなさん、思いっきり勉強していますか?

岩手県立大学後援会長
はしば歯科医院 **橋場 友幹**さん

本学は、すばらしい学習環境に恵まれています。充実した設備を背景に、著名な教授陣が日々の研究に情熱を傾け、さらに「実学実践」の旗印のもと、学生一人ひとりにきめ細やかな教育が施されています。貴重な青春時代、多くの友人を得て、生活に追われることなく勉強に没頭できることはしあわせなことですね。

もちろん、勉強というものは、社会に出てからも一生続きます。ただ、その楽しさに気づき、健全な勉強の習慣が身に付くのが、多くは大学時代ではないでしょうか。受験勉強とは全く異なり、好きな分野で普遍的な知識ないし技術の習得が習慣づけられる。そんなチャンスに満ちているのが、まさに今なのです。

一方で、現今の就職問題の奥深さには胸を痛めます。ともすると、学生生活の半分が就職活動のために費やされています。就職試験や面接対策についての技術論についてはその大切さは否定しませんし、大学では就職サポートへも厚い手当てがなされています。ただし、あくまでも、社会に出てから生きていく力の根元はその個人の中にあります。実社会で必要なことは、小手先の知識ではなく基本的資質としての「気概」であり、向上心を持ち続ける能力です。そしてそれは、大学での真摯なる学びのプロセスで培われるのではないでしょうか。

われわれ後援会は、皆さんの健康と、自己実現の成就を願っています。ぜひ、自らの力を信じて、精進を続けてください。

在学中に何かをやり込んでおくと良いと思う

岩手県立大学同窓会東海支部長
アイシン・コムクルーズ株式会社 **三浦 康幸**さん

東海地方で暮らしていますが、私は岩手出身です。岩手出身・県立大学出身ならではの話せる事もあると思い同窓会総会の設定をしました。同窓会は、情報交換の場であり、岩手を懐かしむ場でもあります。同窓会のメンバーは、17人ですが、そのうち7人がアイシングループの関係者・ソフトウェア情報学部出身者で、支部長・幹事ともにアイシングループに勤めています。他の同窓会支部との交流の予定は特に無いのですが、機会があれば一緒に活動できればと思います。

最近、県大のポストカードを見て改めて、四季によって変化する美しい景観こそが県大の魅力だなと感じました。休憩・活動する場も十分あり、勉学に励む場として良い環境だったと思います。

学生のみなさんにアドバイスしたいのは、在学中に、何かをこれでもかというくらいやり込んでおくと良いということです。大学生活の軸というか、やり込むものが中心の生活を過ごすくらいまで熱心に取り組むことです。私の場合は研究室にこもってコンピュータに触れ続けることでした。やり込むものは何でも良くて、極端なことをいえばゲームでもよいのです。やり込むから得るものが何かあると思います。それが就職活動でもアピールするポイントとして使えるのではないでしょうか。やり込んだものが人と違った特徴的なものであれば言う事はないと思います。

東海地方にいるので感じる事だと思いますが、岩手県立大学は、まだできたばかりの大学で知名度があまり高くない。良い大学だと思うので、在学生も卒業生も、もっともっと活躍して有名になって欲しいと思います。

「メッセージ」

夢を生きる　卒業生の今を知りたい

CAREER MESSAGE

Link Web IPU

地域の課題をみつけ その解決に携わる役割を担いたい

雫石町役場上下水道課　上水道グループ主事 **大橋 真里菜**さん
●ソフトウェア情報学部［平成21年3月卒］

雫石町は誰もが住みたくなる魅力ある町だという大橋さん。職場では、上下水道料金の請求、収納、徴収業務などを担当しています。

「仕事では、地域の方と接する機会もあるので、コミュニケーション能力が求められますが、容易なことではありません」と話す大橋さん。大橋さんは、大学時代に学んだインテリジェントソフトウェアシステム学講座（藤田研）の「宮澤賢治プロジェクト」に自身のスキルアップのためのヒントがあると考えています。

「プロジェクトでは、感情を考慮して人の思考を推測し、システムの行動を決定するソフトウェアシステムの開発を行うのですが、私は主に声のピッチ・パワー・時間といった音声特徴と感情の関係を研究していました。お客様の話をよく聞き、相手が何を求め、何を言いたいのかを理解し判断する際に学んだことを生かすよう努めています」

大橋さんは、今後は、地域の課題をみつけ、課題解決をすることで、町のより良い暮らしと訪れたい町づくりに尽力する、そのような役割を担う人材でありたいと考えています。

ボランティアとビジネスをつなぎ 新しいビジネスモデルの創出に挑戦

NPO法人学生ビジニティいわて理事長 **佐々木 正人**さん
●総合政策学部［平成21年3月卒］

NPO法人学生ビジニティいわては、「若手人材育成」と「ビジネスチャレンジ」をテーマに、ベンチャー企業と学生のつながりを創出する組織として平成17年に誕生。佐々木さんは、2代目の理事長として、多忙な毎日を送っています。

「大学生が様々な地域づくりに挑戦できる機会を提供していますが、ボランティアとビジネスをつなぎ、地域活性化につながる新しいビジネスモデルを創出したいと考えています。活動には、県大生はもちろん他の大学の学生も参加しています。理事長の役割は、スタッフや学生に組織の目的や仕事の方向を伝え、ビジネスチャンスをつくること。組織の顔として外に出向いて営業することが日常の仕事です」

佐々木さんは、毎年5月に県大において1年生を対象としたNPO活動説明会を開いて、学生スタッフ参加希望者を募っています。

「学生のチャレンジ精神に期待したいと力説しています」という佐々木さん。佐々木さんは、学生には大学時代の自由な時間を無駄にすることなく、学生だからできることを大切にしてほしいと願っています。